ゆきのん物語

星のふった日

文・絵　うなむ

こんにちは、わたし、ゆきのん
四つ葉のクローバーの妖精だよ

こうやってクローバーを
風に乗せて世界中を飛んでいるの

今日は、わたしがある街で
出会った女の子のお話をするね

ゆきのん物語

星のふった日

文・絵　うなむ

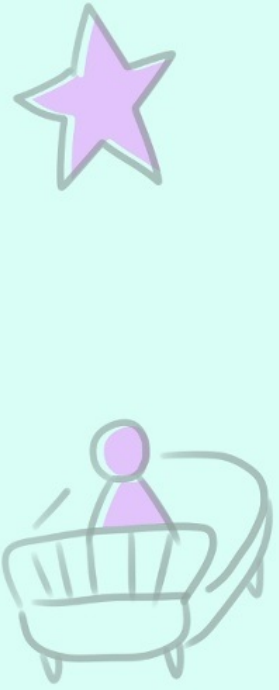
それは、
ある冬の日でした。
ゆきのんは、
いつものように風に乗って
クローバーでふんわりと
その街に降りました。
すると、
街はクリスマスのシーズンで
ワイワイと楽しそうに
多くの人でにぎわっていました。
そして、
人々は、ゆきのんを見つけるなり
気さくに話しかけてきてくれました。
そこで、あることを聞きます。

『1年前にも
突然現れた女の子がいる。』と。

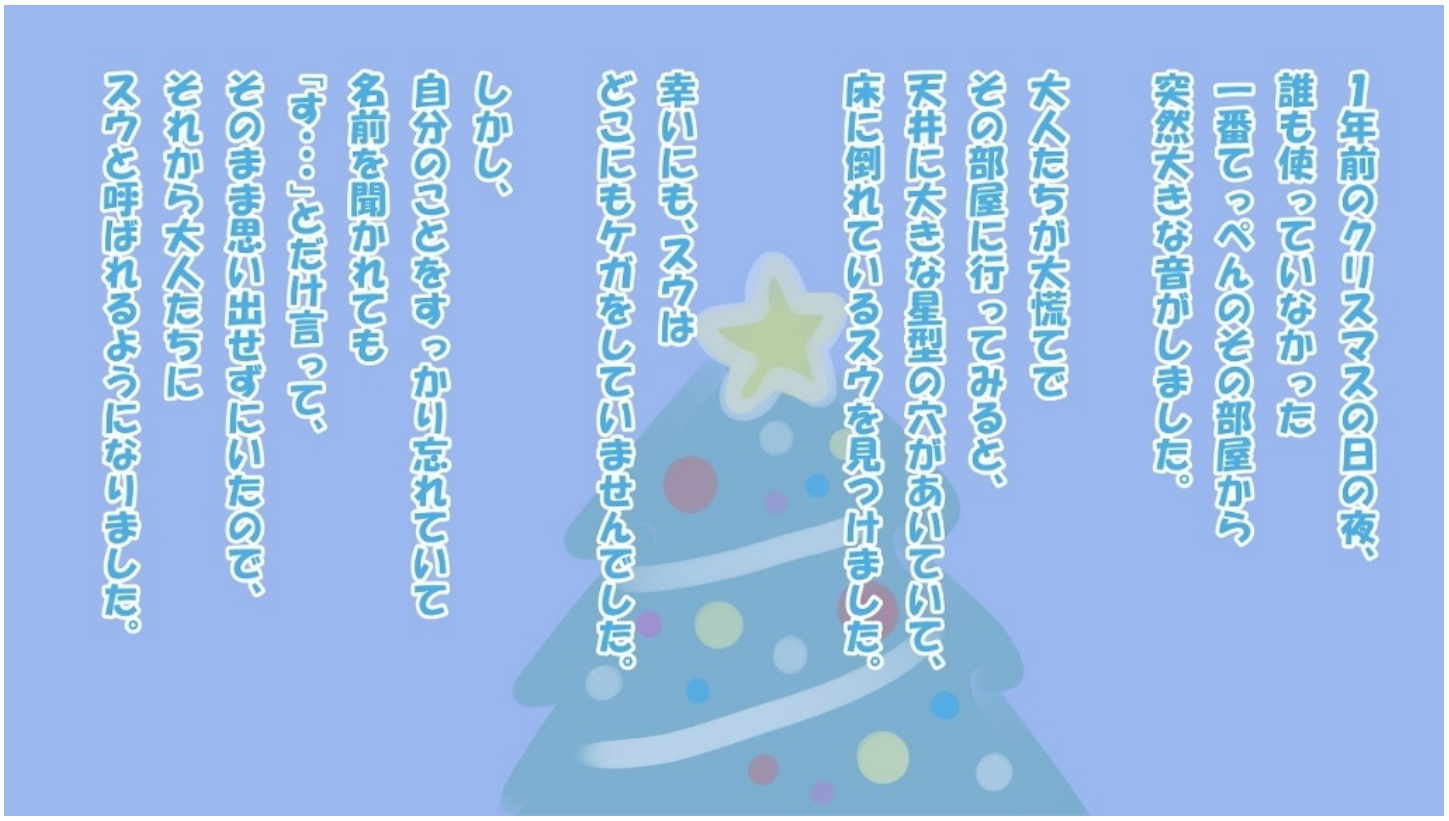
それを聞いて、ゆきのんは
その女の子に興味をもち
会いに行くことにしました。

街の人が案内してくれて
たどり着いた場所は、
多くのこどもたちが一緒に暮らしている
施設というところでした。

ゆきのんがその子の部屋に入ると、
そこには天井に大きな
星型の穴があいていて、
ベッドの上からそれを
見上げる女の子を見つけました。



その子は、名前をスウといいました。
スウは、
キレイな黄色い髪と黄色い瞳の
可愛い女の子でした。


1年前のクリスマスの日の夜、
誰も使っていなかった
一番てっぺんのその部屋から
突然大きな音がしました。
大人たちが大慌てで
その部屋に行ってみると、
天井に大きな星型の穴があいていて、
床に倒れているスウを見つけました。
幸いにも、スウは
どこにもケガをしていませんでした。
しかし、
自分のことをすっかり忘れていて
名前を聞かれても
「す…」とだけ言って、
そのまま思い出せずにいたので、
それから大人たちに
スウと呼ばれるようになりました。

そして、
不思議なことに、
スウは、
昼間に寝て、夜は起きている
という生活をしました。

ですから、
困った大人たちは、
星型の穴の部屋を
スウだけの部屋にして、
夜の間、電気をつけて
ずっと起きていても
平気なようにしたのでした。

しかし、
スウは明かりもつけずに
毎晩、その穴から見える夜空を
ずーっと見上げていました。

そんな生活が1年も続きました。

なぜなら、
迷子の届けをどこに出しても
どこからもスウの親らしき人が
迎えに来なかったからです。

「私、きっと。
親に捨てられた悪い子なんだわ。」

スウはゆきのんに言いました。

「そんなことないわよ。
それに、
あなたは悪い子なんかじゃないわ。」

「ありがとう。
ゆきのんって、優しいのね。」

「本当よ。
わたし分かるの。妖精だもの。」

「妖精って、どんなことするの？」

「そうね、わたしの場合、
ワクワクした心を
見つけるのが好きなの。
ワクワクした心に
このクローバーの種を蒔いてね、
もっと多くのワクワクの花を
咲かすのをお手伝いするのよ。」

「わー、スゴイ。
なんだか、面白そうね。
ねぇねぇ、
そのクローバーで飛ぶって
本当？」

「えぇ、そうよ。
風に乗ってね。」

「空を飛ぶって気持ちいいわよね。
私も大好きなの。」

その言葉に、
ゆきのんはビックリしました。

「スウも空を飛んだことあるの？」

「え・・・」

スウも自分の言葉に驚いたようです。

「もしかして。」

ゆきのんは、
あることを思いつきました。

「ねぇ、スウ。もし、良かったら、
今夜、一緒に空を飛んでみない？」

「え、いいの？」

「うん、もちろん。
でも、みんなには内緒よ。」

「わかったわ。」

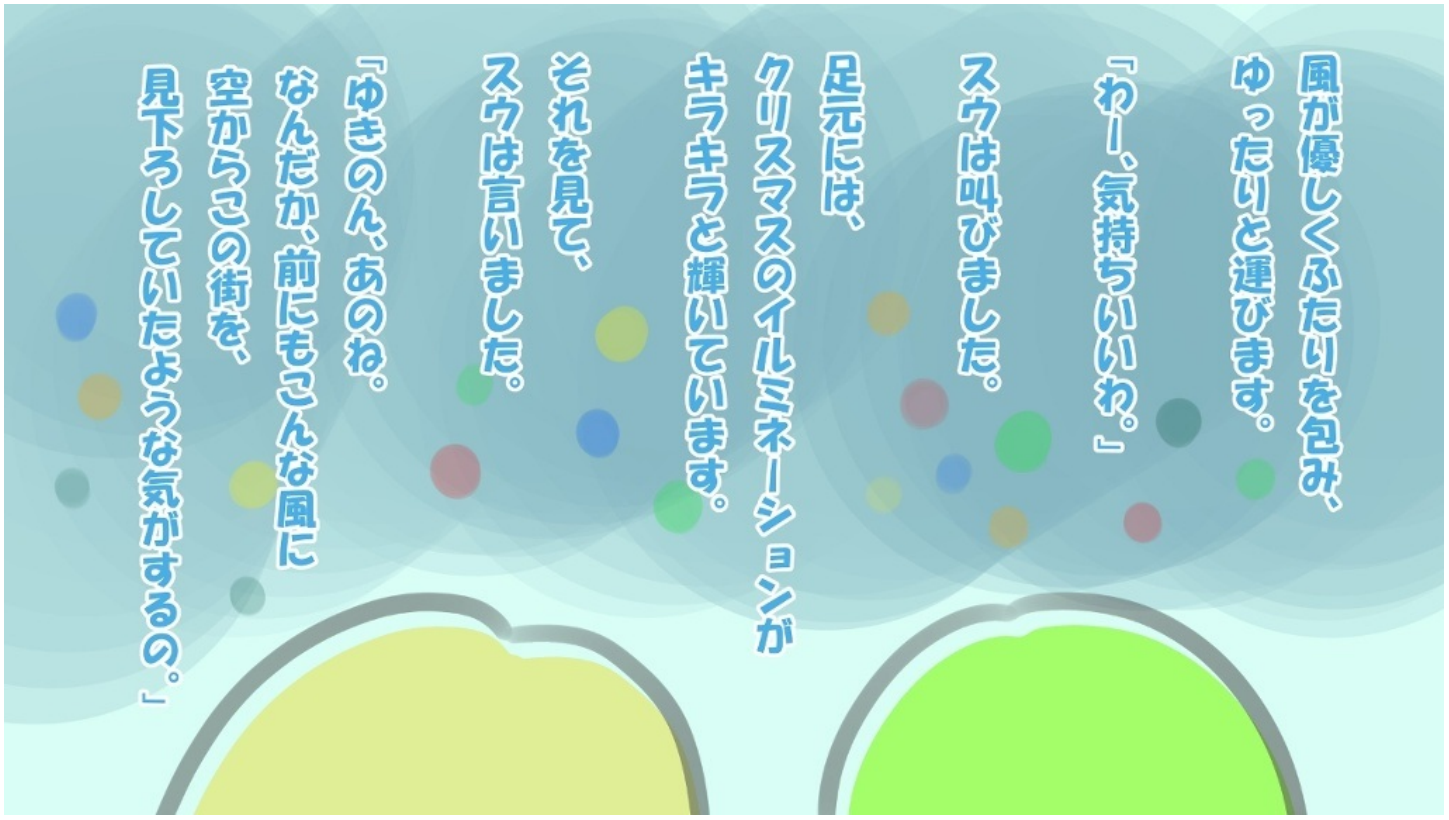
その夜、ゆきのんは、
スウの部屋の星型の穴に
ふんわり飛んで入りました。

「おまたせ。さぁ行きましょう。」

「う、うん。」

スウは少し、
緊張しているようでした。

「大丈夫よ。
しっかり、このクローバーに
つかまっててね。」
「わかったわ。
本当はね、
ドキドキもしてるけど、
ワクワクもしてるの。」
「ふふふ。
分かってるわ。
じゃあ、行くわよ！
それー！」
ゆきのんの掛け声とともに
ふたりは、
夜空に舞い上がりました。


風が優しくふたりを包み、
ゆったりと運びます。
「わー、気持ちいいわ。」
スウは叫びました。
足元には、
クリスマスのイルミネーションが
キラキラと輝いています。
それを見て、
スウは言いました。
「ゆきのん、あのね。
なんだか、前にもこんな風に
空からこの街を、
見下ろしていたような気がするの。」

「そのとき、
どんな気持ちだったの？」

ゆきのんはききました。

「ワクワクしていて、
風が気持ちよくて、
街のキラキラを
みんなにも見せたいと思ったわ。」

スウはいつの間にか、
泣いていました。

「そうだわ。
私、このキラキラに見とれていて
いつの間にか、みんなとはぐれたのよ。」

「スウ、みんなって誰のことなの？」

「それは。」

スウは、
もう思い出していました。

「それはね、私の家族よ。」

それを言うのと同時に、
スウは輝いた星の上に
乗っていました。

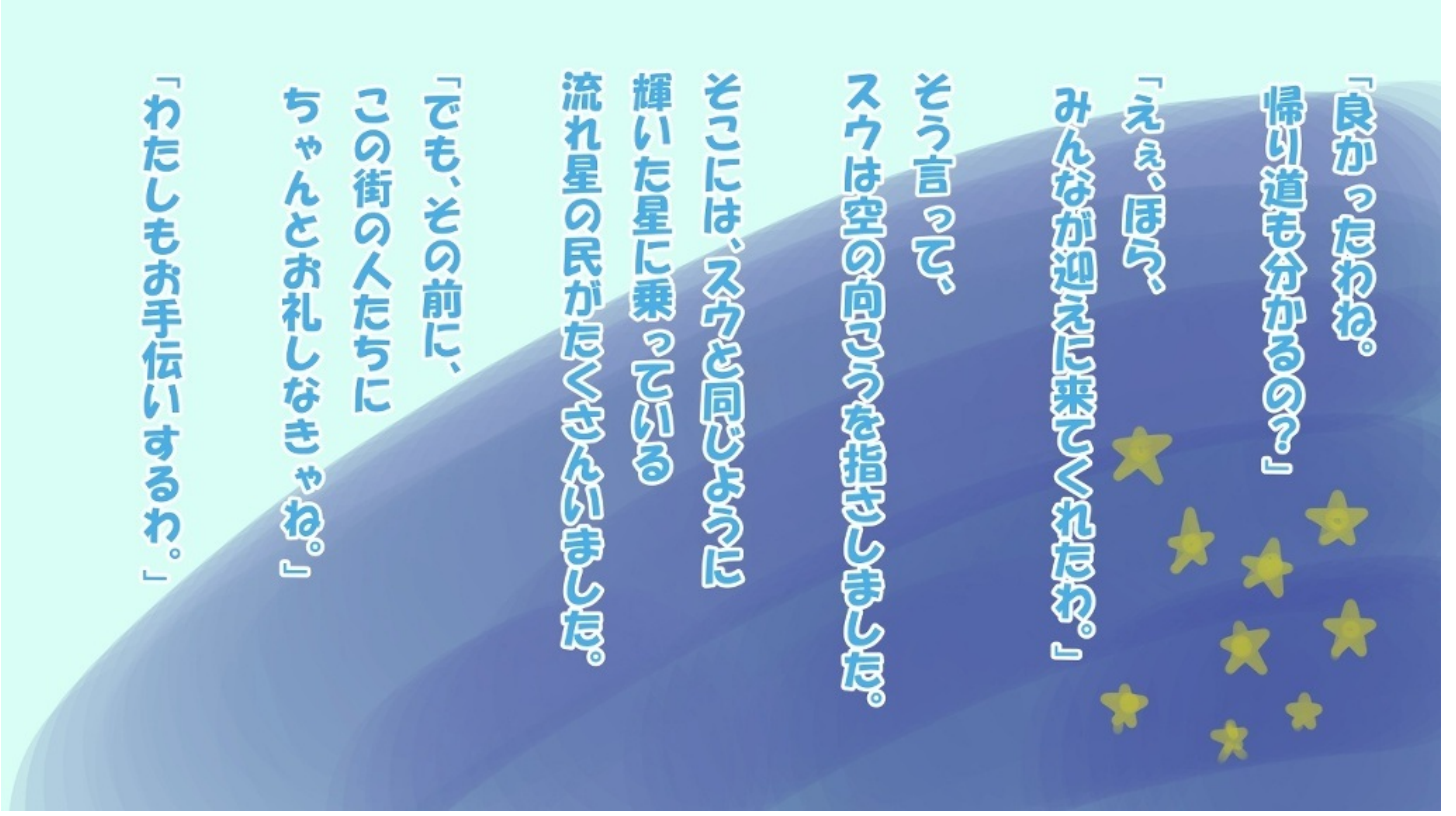
それを見て、
ゆきのんは言いました。

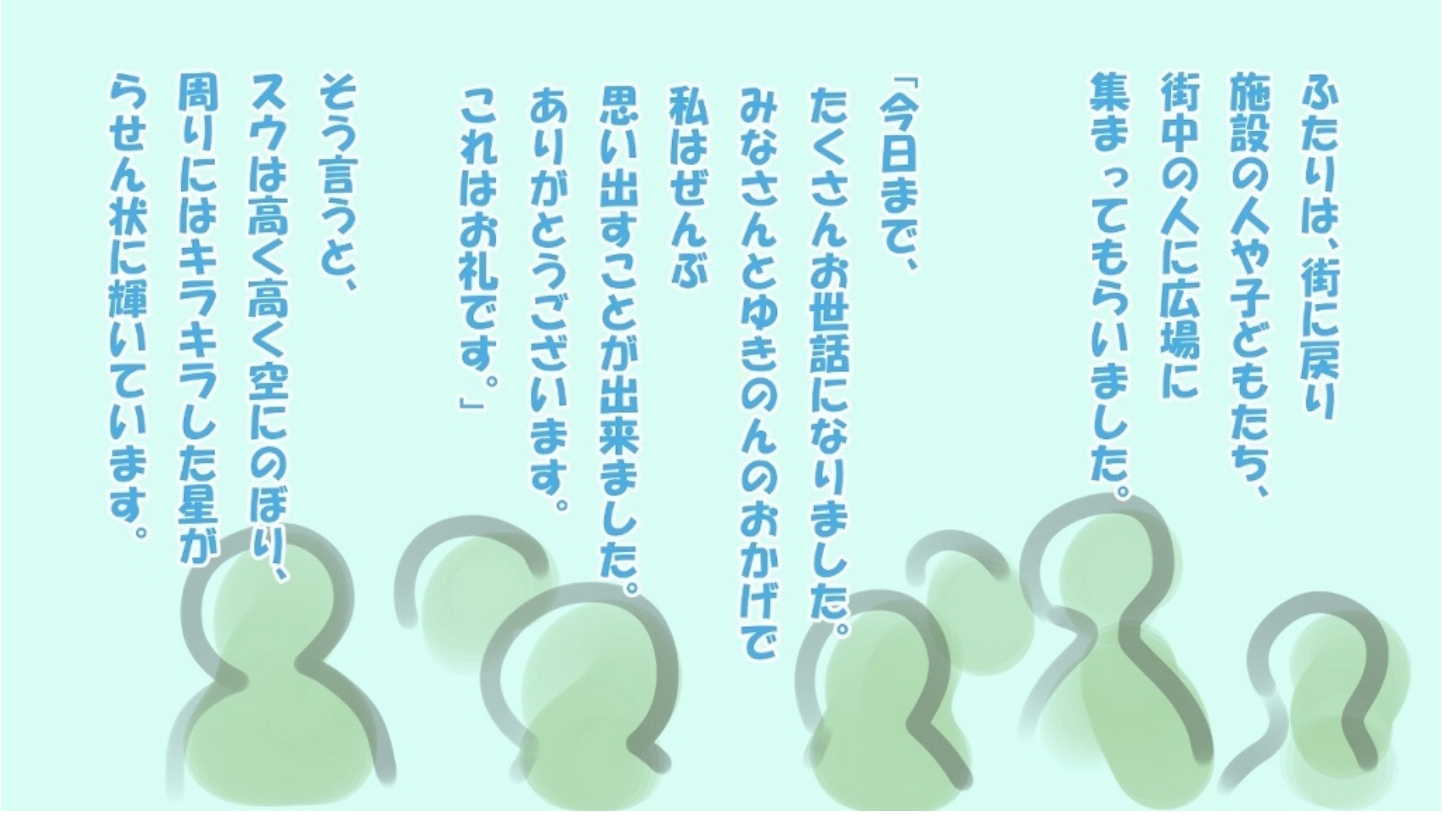
「やっぱり、
あなたは流れ星の民ね。」

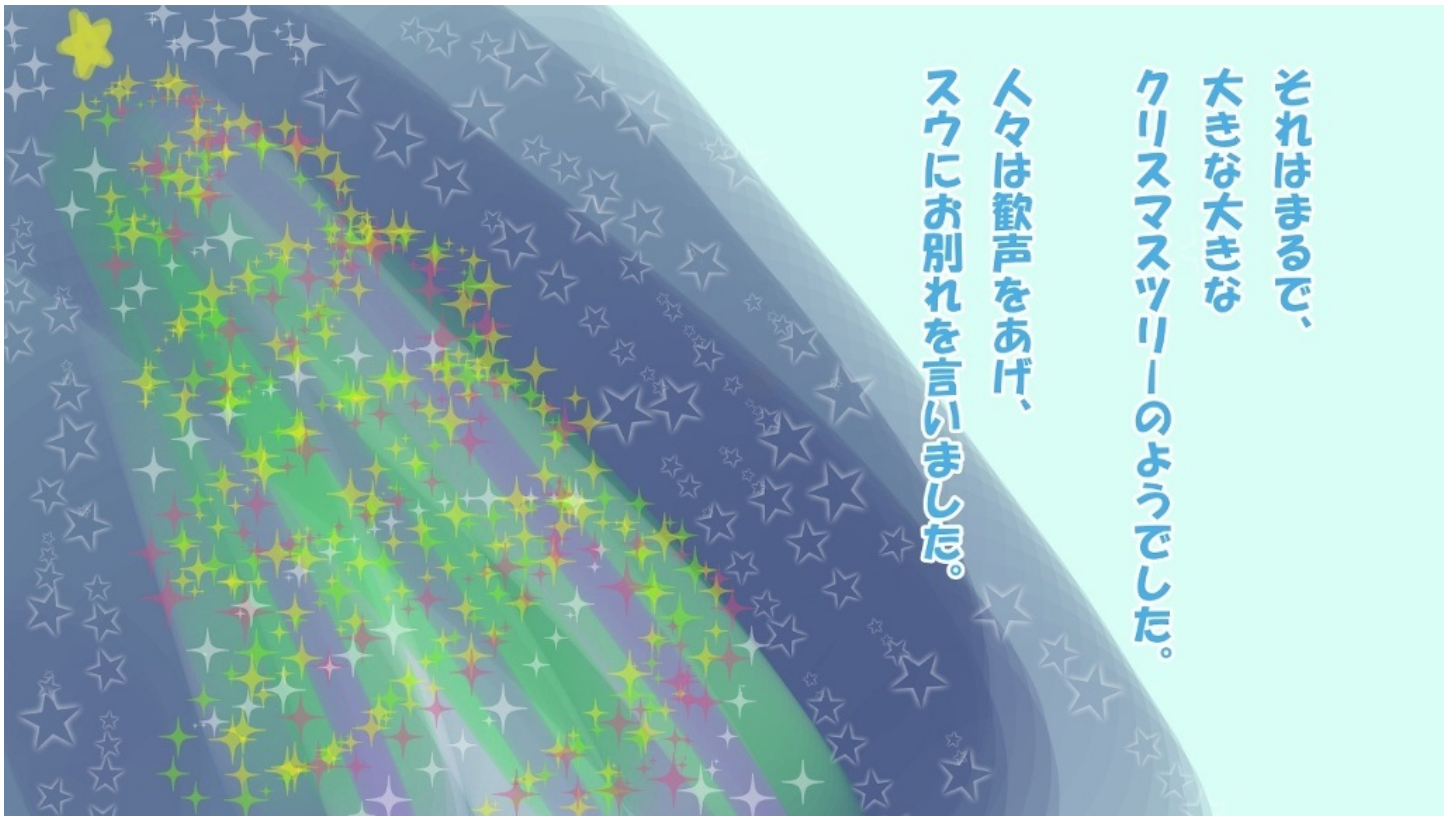
「うん、私は流れ星の民で
本当の名前は、ステラだわ。」

「ステラ、素敵な名前ね。」

「ゆきのん、ありがとう。
あなたのおかげで、
思い出すことが出来たわ。」


「良かったわね。
帰り道も分かるの？」
「えぇ、ほら、
みんなが迎えに来てくれたわ。」
そう言って、
スウは空の向こうを指さしました。
そこには、スウと同じように
輝いた星に乗っている
流れ星の民がたくさんいました。
「でも、その前に、
この街の人たちに
ちゃんとお礼しなきゃね。」
「わたしもお手伝いするわ。」


ふたりは、街に戻り
施設の人や子どもたち、
街中の人に広場に
集まってもらいました。
「今日まで、
たくさんお世話になりました。
みなさんとゆきのんのおかげで
私はぜんぶ
思い出すことが出来ました。
ありがとうございます。
これはお礼です。」
そう言うと、
スウは高く高く空にのぼり、
周りにはキラキラした星が
らせん状に輝いています。


それはまるで、
大きな大きな
クリスマスツリーのようでした。
人々は歓声をあげ、
スウにお別れを言いました。

そして、ゆきのんも
ひとりひとりの心に
ワクワクの種を蒔き、
クローバーの芽が出るのを
ぜんぶ見届けました。

「さよなら、ステラ。
また、どこかでね。」

スウのクリスマスツリーは、
ずっと遠くの方まで延び、
その輝きは、人々の心に
永遠に刻まれました。

終わり